



Newsletter

奈良女子大学附属学校園

No.3 2006/05/26

ぐんぐんのびる

諸岡 英雄(附属小学校長・生活環境学部)

「山のわらび ぐんぐんのびる 春の日をあびて ひとりで伸びる」。附属小学校の学習歌「伸びていく」の一番の歌詞である。この歌を始業式そして入学式で聴いたとき、児童の、元気で明るい歌声が体育館（講堂）に満ち、ぐんぐんと子供たちに引っ張り上げられていくようでした。「ぐんぐんのびる」という言葉に力強さを感じました。私の専門はアパレル感性工学です。感性工学では、対象に対する感性を言葉と数字を用いて数量化しています。この言葉は児童の発達を表現するには最適な言葉の一つだと思いました。また、附属小学校の教育理念の中に、「しごと」「けいこ」「なかよし」の教育構造があります。これらも素晴らしい言葉があります。「しごと」は将来の仕事に通じ、「けいこ」は努力に、「なかよし」は協力に通じます。これらの学習から、児童は立派な社会



人になるための基礎を学ぶことができるでしょう。このような優れた小学校の校長として赴任できることは大変喜ばしいことですが、責任は重大だと感じております。大学の法人化に伴い、学内はおおきく揺れ動いております。附属小学校もこの歴史的大変革の流れに乗り、そして乗りきり、ぐんぐんのびたいと思います。

子どもの自然・人の自然

浜田 寿美男(附属幼稚園長・文学部)

人生の暦が一巡りして、いよいよ還暦を迎えようかという歳になって、幼稚園でのお仕事をいただくことになりました。これだけの年輪を重ねて、相当にひねくれた年寄りになっているのですが、それでも幼い子どもたちの前に立てば、やはり「7つまでは神のうち」と言いたくなる気分を味わいます。それだけ子どもたちは自然に近い存在なのだと、つくづく思います。

発達心理学を専門として、数えてみれば40年近くも子どもに関わる仕事をしてきたわけですから、一般の人に比べても子どもとは縁が深いところに生きてきたはずなのですが、今という時代にいつも違和感を抱きつづけてきたためでしょうか、子どもの育ちや発達の問題に対して、どこか斜に構えるところがあって、素直に子どもたちと向き合う体験はあまり多くなかったかもしれません。

いまあらためて子どもたちのいる現場に身を



において、その子どもたちとともに生きることを、親御さんたちや先生方と一緒に楽しむことができれば、という思いでいます。あわせて「子どもの自然」を守り、育て、同時に私たちのなかにも「人の自然」を取り戻し、広げていくことができると願っています。どうぞよろしくお願いたします。

附属学校部長は、水上 戴子(生活環境学部教授)が再任となりました。

附属中等教育学校長は、植野 洋志(生活環境学部教授)が再任となりました。

祝「研究開発学校」指定 — 本学附属学校園 —

研究開発学校とは、学校現場から提起される問題や、社会の変化から要請される課題に対応するべく、先導的な教育研究開発のために文部科学省から研究指定される学校のことです。

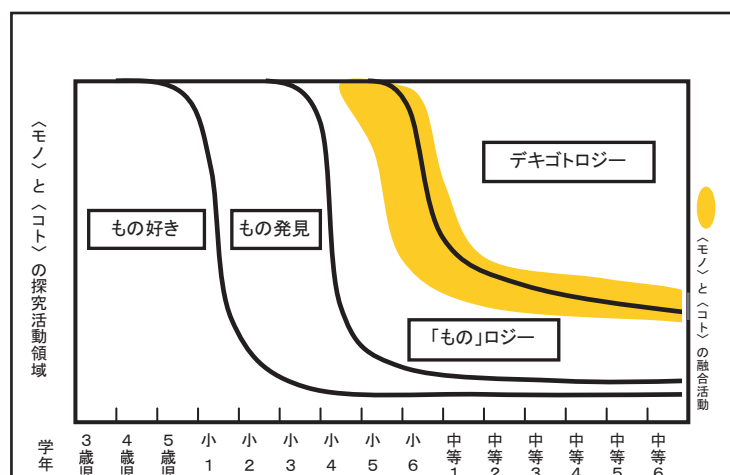
この度、本学附属学校園は、附属幼稚園、附属小学校、附属中等教育学校の3校園合同で、平成18年度から平成20年度の3年間にわたって「幼・小・中等15年間にわたり、事物認識とその表現形成の徹底化を通して、独創的で『ねばり強い』思考能力を育成する教育課程の開発」の研究課題で文部科学省の研究開発学校指定を受けることとなりました。

子どもたちの思考力がはぐくまれる過程には、幼児期における探索活動での身近な「もの」に対する素朴な発見や純粋な感動に始まり、小学校時の「もの」に対するさらなる興味とこだわり、また、小学校高学年時頃に芽生える、ものからコトに対する関心の広がりを経て、中等教育時ごろにはデキゴトへの関心と思索へと深化していく姿が見られます。本研究開発は、この子どもたちの成長過程を支援するプログラムを、実際の現場の子どもたちの様子から立ち上げつつ、本学の教育システム研究開発センターのバックアップを得ながら、発達学的観点からもとらえなおし、子どもたちの「独創的で『ねばり強い』思考能力を育成する教育課程の開発」という形でまとめ上げていこうというものです。

活動においては「探る—観る—表す」を基本に据えており、いわゆる「総合的な学習」的な活動が中心です。本学附属学校園は「総合的な学習」においては、常に先進的な取り組みを

行ってきた伝統があります。世間では「総合的な学習」について、議論があるところのようですが、本研究開発は、いわば「総合的な学習」においては「老舗」であるところの本学附属学校園が「総合的な学習」とはそもそも何なのか、どのようなことでどのような力を子どもにはぐくんでいくのかというところの一面を世に示そうとする野心的で画期的な取り組みといえるかと思えます。

また、異校種3校園合同の研究開発という特徴を生かした、異校種間の相互乗り入れの授業や、異校種間連携活動「はてな? のひろば」の取り組みなども取り入れ、従来の学校教育の枠をさらに進化させた提言にもつながるような研究をと考えています。多方面からのご理解とご支援を、どうぞよろしくお願ひいたします。



「食教育研究推進本部」と連携して

この4月末、政府の食育推進会議で決定された「食育推進基本計画」が示されました。昨年6月の食育基本法の制定に続き、これで国内の各機関がこぞって食育に向かって動き出す体勢が整ってきました。今後は、各県、各自治体、各種関係機関での食育推進事業に関する具体的計画が策定されていくものと予測されます。

当附属学校部においては、「食教育プロジェクト」を組織し、食教育の実践化に向けてプログラム(カリキュラム)づくりを中心にした取り組みを進めてきたところです。幸い、18年度の概算要求で食教育改革推進事業が予算化されたことを受け、その後は本学生活環境学部食物栄養学科に軸足を置いた取り組みに方向転換してきています。そして、活動の拠点を「食教育研究推進本部」に移し、本学における関係部署の力を結集して、さらに食教育研究の進展を図ろうとしています。

さっそく、今夏8月25日(金)、本学主催による「食教育推進フォーラム」を開催する計画が進行中です。

なお、18年4月配置を要請していた栄養教諭が、4月16日付けで着任しました。奈良県下では、最初の栄養教諭誕生が実現しました。

ここに至るまでの間の、附属学校部をはじめ、関係部局の皆さまのご支援・ご助力に対して衷心より感謝申し上げます。



子ども達との食学習を通して、家庭との協力関係や食の意識改革を図っていきたいと思っています。

栄養教諭
太田原みどり

スーパーサイエンスハイスクール(SSH) 第1年次の成果

附属中等教育学校は、2005年度から5年間スーパーサイエンスハイスクール(SSH)の研究開発指定を受けました。本校の特徴である、6年一貫であること、大学附属学校であることを生かして、次のような方針で研究を進めています。

「自然科学リテラシーと自己学習力を身につけることで、学校卒業後も能力を伸ばしていく科学技術系の人間を育成するための、中高6年一貫教育SSHカリキュラムを研究開発する。1年～4年は全校生徒を対象として、文科系・理科系の区別なく自然科学リテラシーを育成し、3年～6年で徐々に対象生徒を絞り込みながら自然科学リテラシーを伸ばしていくカリキュラム・教材・指導方法を研究し、実践していく。また、高学年(5・6年)になり、より進んだ数学・理科の内容の学習を希望する生徒には、大学教員・研究者による特別講座を提供し、さらには大学の講義を受講できるシステムを構築するための研究を行う。」

研究初年度の1年間を振り返ると、SSHの研究成果として次のことがいえます。

- ①数学科教員と理科教員が合同で授業研究し、自然科学リテラシーの育成というキーワードで研究授業・授業観察、研究協議が実施できました。
- ②「NSL特設講座」や「理数講義プログラム」等では、一流の研究者の話が聞け、生徒に「本物」を見せることができました。生徒たちは、研究者から感銘を受けていたようです。
- ③研究室訪問や特別講義などを通して、本学(奈良女子大学)・京都大学・同志社大学等との連携が図れるようになりました。特に附属学校として本学との連携が強化されました。
- ④サイエンス研究会を創設し、理数に興味・関心のある生徒たちが活躍できる場ができました。問題意識を持って研究を進め、SSH研究発表会のポスターセッションで発表することができました。

SSHの研究開発は今後4年間続くので、短期的な成果を追い求めるのではなく、他校にも敷衍できるようなカリキュラム研究として進めていきたいと考えています。



奈良女子大学研究室訪問



SSH研究発表会



サイエンスツアー

施設の安全対策進む

大学の理解を得て、施設面での安全対策が進みました。

●附属幼稚園

廊下やプレイコートの改修が行われ、遊んで転んだ時の安全度が高まりました。

●附属小学校

老朽化していた跳び箱8台がいききに更新されました。

●附属中等教育学校

フェンスの改修(約250m)が進んでいます。また、運動場南側が民有地になることもあって、防球フェンスの増設も予定されています。



附属小学校の1年生「子ども安全教室」

昨今、周知のように、小中学生が被害者となる悲惨な事件が連続して発生しています。本附属小学校においても、子どもの安全確保は、学校運営上、焦眉の急となっています。

子どもの安全確保、学校の安全管理は、ハード・ソフトの両面からの方策が必要です。現在の附属小においては、警備員の配置・監視カメラ設置・門扉のオートロック化・さすまたの配備等々、校内でのセキュリティはずいぶん整備していただいております。また、子ども全員に「防犯ブザー携帯」もしています。

今一番の課題は、子どもの登下校時の安全確保の問題です。特に、自宅から最寄りの駅（またはバス停・徒歩での学校）までの区間が、最も大きな心配事（危険度が高い）なのです。ここでは、ある程度、子ども自らの「自己防衛」に頼らざるを得ません。

そこで、新入学早々、1年生を対象に「子ども安全教室」を開催（4月20日）しました。当日は、奈良西警察署地域防犯対策担当の署員の方にお越しいただき、「自分の命は自分で守る」ための「やくそく」をご指導いただきました。

～5つのやくそく～

- ①知らない人にはついていかない。
- ②無理に連れて行かれそうになったら、大きな声で「助けて！」と叫んで逃げる。
- ③急いで近くの大人に知らせる。
- ④一人では遊ばない。
- ⑤遊びに行く時は、どこで、誰と遊ぶのか、家の人に言ってから出かける。



附属幼稚園のみんなで迎える「入園式」

園庭の桜が美しい4月12日、期待に胸膨らませて保護者に手を引かれた新入の子どもたちが幼稚園にやってきて、水上附属学校部長、植野中等教育学校長、諸岡附属小学校長の参列も賜り、入園式が行われました。初めての集団社会に入る我が子の晴れ姿を見ようと出席する保護者の数は年々増え、狭い遊戯室がいっぱいになります。保護者にとっても期待が大きいようです。

当園の入園式は新入園児が保護者と一緒に中央に向けて椅子に座り、対面するように在園児が座ります。以前は子どもだけで前を向いて椅子に座る形で行っていましたが、10年ほど前に子どもの不安を減らし、楽しく参加できるようにやり方を見直しました。保護者がすぐ横にいてくれるということで安定して式に参加でき、泣いて参加できない子どもも減りました。内容については、園長先生の話や育友会・後援会の代表の挨拶などとともに、年長児が「お迎いの言葉」を言ったり、合奏や歌を披露したりしています。初めての場所で緊張している新入園児にとって、年長児の心のこもった言葉を聞いたり、親しみのある曲を耳にしたりすると気持ちが和むようで、身を乗り出して聞いたり、一緒に口ずさんだりして楽しんでいました。今年度も、とても和やかな雰囲気です式を終えることができました。



奈良女子大学附属学校園 Newsletter 03

2006年5月発行

奈良女子大学附属学校部

〒630-8506 奈良市北魚屋東町

TEL.0742-20-3938

Web <http://www.nara-wu.ac.jp/fuzoku/>